勉誠社

Benseisha

刊行書籍一覧

2023

国文学

日本史
（世界史・その他）

東洋史・東洋文化

美術・芸術

図書館情報学・
アーカイブズ学・
書誌学・本の本

ご注文方法

勉誠社 WEB でご注文

弊社ホームページ（https://bensei.jp）にアクセスのうえ、
手順に沿ってご注文ください。迅速・確実です！

勉誠社に直接ご注文

メール・ファックス・お電話などで弊社営業部宛に直接ご連絡ください。
以降のお手続きをご案内いたします。

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-18-4
電話＝03-5215-9021
FAX＝03-5215-9025
E-mail＝info@bensei.jp

書店様でご注文

ご懇意の書店にご用命ください。全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。
Amazon ほか、各種 EC サイトでもご購入いただけます。

勉誠社
刊行案内
2023
国文学

近世後期江戸小説論攷

山本和明［著］

近世後期、版本・写本による書物流通は一層の広がりをみせ、多種多様な知識が創作・出版の場にも流れ込んでいった。作者が作品を構築する際に、如何にその典拠を選びとり、構想したのか。古語や古い文体に対する豊富な知見を、どのように作品と言う形に結実させていったのか。挿絵と文との連環関係は如何に発展的に展開されたのか。山東京伝、石川雅望の作品を軸に、作品の背後にある知的空間、そして、それらを縦横無尽に駆使していった作者たちの営みを、作品そのもの、そして、関連する資料から炙りだす。従来の典拠研究、様式研究とは一線を画す、新たな文学研究の方法を示す画期的な一書。

A5判上製・472頁・2023年2月刊行
978-4-585-39022-0・定価11000円（税込）

宣教師の日本語文学

研究と目録

郭南燕［編著］

幕末から現代まで、多数のキリスト教の宣教師たちが日本を訪れ、膨大な書物を日本語で著述した。外国人宣教師はなぜ、日本語で書いたのか。本書では、確認できた442名の宣教師が日本語で著した、約2700にも及ぶ文献を精査。彼らの日本語使用の特色、ヨーロッパ思想の紹介、日本文化への寄与、日本人との協力を取り上げて、これまで等閑視されてきた「宣教師の日本語文学」という新分野の開拓を試みる。宣教師の著書の書誌情報をまとめた「外国人宣教師日本語著作目録」を収録。

A5判上製・480頁・2023年2月刊行
978-4-585-39026-8・定価12100円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
国文学

江戸時代前期出版年表

〔万治元年～貞享五年〕

岡 雅彦［編］

出版文化の華開いた万治元年から貞享五年の三十年間に、どのような本が刷られ、読まれていたのか。江戸文化を記憶し、今に伝える版本の情報を網羅掲載。万治元年（1658）から貞享五年（1688）の30年間に刊行されたあらゆる出版物の総合年表。掲載件数8700点超！（当該期刊行版本の後印を含む）
広大な江戸時代の出版文化の黎明期を映し出し、近世文化研究の基盤として好評を博した『江戸時代初期出版年表〔天正十九年～明暦四年〕』（2011年）の待望の続編、公刊！

B5判上製・1184頁・2023年2月刊行
978-4-585-32029-6・定価35200円（税込）

源氏物語歌筐

伊東祐子［著］

生きる喜び、人を愛する幸せ、愛するがゆえの苦悩、別れの悲しみ、老いへの恐れ…。『源氏物語』に登場する人物たちは誰もが歌をよみ、その心情を伝える。また、古歌を踏まえた表現―「引歌」―により、物語の世界観はより一層豊かなものとなっている。本書では『源氏物語』のあらすじを、作中人物歌・引歌とともに丁寧に解説。
和歌とともに、作中人物の重要な会話文や心内語（心中思惟）をも丹念に読み解き、臨場感あふれる魅力的な物語世界を感じることができる。『源氏物語』入門書としても最適な一冊。

A5判上製・432頁・2023年2月刊行
978-4-585-39017-6・定価7150円（税込）

王朝物語論考
物語文学の端境期

横溝博［著］

平安後期から中世、さらには近現代においてもなお、王朝文学はその命脈を保ち、生成されていく。旧い趣向を滋養として吸収しつつ、時代の壁を越え、新しさを打ち出していく不断の営み――。これら王朝物語の世界の豊饒さは、物語文学生成の最先端の場を今に伝える貴重な証言である。言語表現やプロット、さらには絵画表現へも視角を広げ、相互に干渉し、響き合う物語相互の関係性を動態として捉え、新たな王朝文学史構築のための礎を築く画期的著作。

A5判上製・608頁・2023年2月刊行
978-4-585-39024-4・定価13200円（税込）

学習院本「藤袴」（榊原本僚帖）の書誌学的考察

武藤那賀子［著］

定家本系統でありながら注目すべき独自本文を具備した鎌倉時代中期写本、学習院大学蔵『源氏物語』「藤袴」帖の全編を高精細のカラー画像にて影印。さらに、全編の翻刻および僚帖である国文研蔵「榊原本」をはじめ、諸本との比較検討による考察を記した研究篇を収載。書誌学的知見を活かした『源氏物語』研究における新たな礎を提示する。

B5判上製・184頁・2023年3月刊行
978-4-585-39023-7・定価16500円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
国文学

深草瑞光寺所蔵元政上人資料集
近世京洛寺院の学問とネットワーク

岡雅彦・落合博志・桑名法晃・長田和也・中前正志・那須陽一郎・原雅子・村木敬子［編］

17世紀を代表する文人僧として日本文化史に巨大な足跡を遺した深草元政上人（1623～1668）。その遺業は中世から近世に至る移行期の日本文化の実態を解明する上で詳細に分析されるべきものである。京都市伏見区深草の元政庵瑞光寺にのみ所蔵される元政上人自筆資料を中心に、彼を取り巻く文人たちの写本資料も併せて翻刻紹介。江戸時代の文化・歴史研究のみならず中世文学や日本仏教学とも繋がりを持つ、膨大かつ貴重な新出資料集として日本研究に幅広く資する。

B5判上製・648頁・2023年3月刊行
978-4-585-31013-6・定価22000円（税込）

俊頼髄脳全注釈

家永香織・小野泰央・鹿野しのぶ・舘野文昭・福田亮雄［著］

歌病・歌体・歌枕など初期歌論書における格式の集成は、言わば、古代歌論の総集であり、それに続く歌語釈は、現存最古の和歌注釈で、かつ『江談抄』とともに貴族説話の嚆矢でもある。定家本を底本にして顕昭本・略本系本を対校した本文に、先行資料および同時代歌論書などの文献を網羅した語釈を付す『俊頼髄脳』全注釈である。

※『俊頼髄脳（としよりずいのう）』とは
源俊頼によって書かれた歌論書。1111～1112年成立とされる。

A5判上製・704頁・2023年3月刊行
978-4-585-39025-1・定価16500円（税込）

文と書
中国書字思想の探究

亀澤孝幸［著］

近代以前の中国において、「書」は文学や絵画と並ぶ最高の芸術とみなされていた。文字をつかさどることは世界の統治と同等の意味を有し、この根源的な政治性とあいまって、文字や言葉を記す「書」は中国文化における重要な地位を占めるに至った。書論のみならず文字学、言語哲学、文学論、画論など文字や書くことに関する諸種のテクストを相互に接続、交差させることで、「文字を書くこと」に関する思想――書字思想の体系を明らかにする。近代以降に形成された造形芸術としての片面的な評価を改め、「書字」という人間の普遍的な営みから「書」の意義を捉えかえす意欲作。

A5判上製・288頁・2023年3月刊行
978-4-585-37008-6・定価8800円（税込）

平安文学の饗宴

中野幸一［編］

『伊勢物語』、『源氏物語』、『土左日記』、『更級日記』…。
様々な作品が相互に連関し、漢詩や和歌などにも多大な影響を与えてきた平安文学。それは平安時代のみならず、近世、近現代の文学など、現代にもつながる潮流となり変容を遂げ続けている。
流動し続ける平安文学の深く豊かな世界を解き明かす。
平安文学研究を領導する22の論考による知の饗宴。

A5判上製・512頁・2023年4月刊行
978-4-585-39028-2・定価16500円（税込）

深掘り！
紫式部と源氏物語

中野幸一［著］

『源氏物語』の作者として誰もがその名前を知っている紫式部。彼女はいつ生まれていつ亡くなったのか、その生涯はどういうものであったのか、どのような性格で、どのような考えを持っていた人であったのか…。『源氏物語』、『紫式部日記』、『紫式部集』などを中心に、系図や当時の記録類、交友関係や周囲の人々との交流などを参考にして、これまで具体的に明らかになっていなかった、紫式部の生涯と人間像を解明する。また、『源氏物語』を読む上で、知っておくとより物語が楽しめる、10のエッセンスも紹介。平安文学研究・源氏物語研究の第一人者が、紫式部と源氏物語の魅力を余すところなく伝える。

四六判並製・256頁・2023年4月刊行
978-4-585-39010-7・定価2640円（税込）

杜甫研究年報
第六号

日本杜甫学会［編］

「詩聖」杜甫。その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

杜甫研究年報6・A5判並製・176頁・2023年4月刊行
978-4-585-39446-4・定価3300円（税込）

江戸時代の貸本屋

庶民の読書熱、馬琴の創作を支えた書物流通の拠点

長友千代治［著］

江戸時代には書物を読むことのできる人びとが庶民にまで広がった。その読書熱を支えた書物流通の拠点が貸本屋である。読者の興味をそそり、見たことのない世界や名所旧跡へ連れ出す書物、隠された秘密や真相を解き明かす書物、便利性に満ちた生活実用書――。これらをすぐに調えて手元に届けるのが貸本屋であった。また、読書熱の高まり、さまざまなジャンルにわたる出版文化の広がりは、近世における創作の場においても、大きな影響を与えた。特にその浩瀚な知識を自らの作品に注ぎ込んできた近世を代表する作家・曲亭馬琴の日記には、近世知識人と書物の関係をまざまざと伝える、特筆すべき内容がふんだんに含まれている。
長年にわたり諸資料を博捜してきた筆者が、江戸時代の貸本屋の展開、そして、書物と人びととのかかわりの諸相を描き出す書籍文化史論。

A5判上製・336頁・2023年5月刊行
978-4-585-39029-9・定価5500円（税込）

本朝麗藻詳注

柳澤良一［著］

平安時代の寛弘年間（1004～1012）、紫式部や清少納言の時代に編纂された、宮廷官僚詩人の漢詩文集『本朝麗藻』の注釈書。『本朝麗藻簡注』（勉誠社、1993年）を全面的に改訂し、作品の内実に迫ることができるように、漢詩文の構成や平仄、漢語の「語性」に注意を払って解読した。

B5判並製・函入・二分冊・928頁・2023年12月刊行
978-4-585-39030-5・定価30800円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
国文学

中国古典をどう読むか

規範からの逸脱、規範への回帰

下定雅弘［著］

中国の作家たちは儒教倫理とつきあいながら人間の真実を表現してきた。フェティッシュな表現に男の愛を託した陶淵明の「閑情賦」、愛する女との別れを語った元稹の「鶯鶯伝」、女性のすさまじい性欲を描いた柳宗元の「河間伝」など…。古来、解釈が定まらない古典作品を、「規範からの逸脱、規範への回帰」という創作手法を鍵として再解釈。その真の主題、作家としての姿勢・戦術を解き明かす。

A5判並製・248頁・2023年6月刊行
978-4-585-39027-5・定価4180円（税込）

紫式部集の世界

廣田收・横井孝［編］

紫式部の和歌を集め、一書と為した『紫式部集』。
かの『源氏物語』の作者による和歌集として、物語理解、また、作者の伝記研究の資料として利用されることが多かったが、『紫式部集』そのものの研究は立ち遅れている状況である。
『紫式部集』と虚心坦懐に向かい合うことで何が見えてくるのか――。
残された諸本における構成への意識、筆跡や料紙などモノそのものが伝える情報、そして、周辺の和歌世界、歴史的背景との連関など、さまざまな視点から『紫式部集』にまつわる根源的な問題を探る。
『紫式部集』研究の来し方行く先を示す廣田收・横井孝の対談も収載。

A5判上製・404頁・2023年7月刊行
978-4-585-39031-2・定価10780円（税込）

比較文学で読む十一の出会い

交差する東西のまなざし

英米文化学会[編]

明治の開国に伴い、外国人によって発見された日本の文化・文学。
まなざしは西から東へと注がれ、日本人もまた、東から西を見つめた。自国と異国の差異を経験し、演劇、小説、落語そして舞踊と多様なジャンルで、個々の葛藤や発見を昇華させた日本人たち。文明開化以降、外国人はどのように日本の文化・文学を紹介し、また日本人たちはどのように日本文化の枠組みの中で、西洋文化を摂取していったのか。
明治、大正、昭和、そして戦争を経て、現代まで続く人々の、日本文化・文学の葛藤と発展を読み解く。

A5判並製・288頁・2023年8月刊行
978-4-585-39032-9・定価3080円(税込)

日本人の読書

古代・中世の学問を探る

佐藤道生[著]

古代・中世の日本において、書物を読み、解釈し、伝えていくことは、限られた人びとにのみ許される特権的な営みであった。中国の文化全般を学ぶことを目的とした学問——漢学——は、国家の制度のなかにも位置付けられ、それを担う家では、書写・刊行された諸種の漢籍を入手し、独自の学問を形成していった。書物に残された注釈の書き入れ、来歴を伝える識語、古記録や説話に残された漢学者の逸話など、漢籍の読書の高まりをいまに伝える諸資料から古代・中世における日本人の読書の歴史を明らかにする。

本書ではじめてフルカラー公開する資料——『清涼山伝』・『文選集注』巻七断簡・『文選集注』巻百十一断簡・金澤文庫本『文選集注』巻六十一残簡・「佐保類切」『施氏七書講義』断簡・「佐保類切」『施氏七書講義』残簡・「道徳経切」『老子道徳経』断簡

A5判上製・520頁・2023年9月刊行
978-4-585-39033-6・定価13200円(税込)

勉誠社
新刊案内
2023
国文学

重要文化財

東福寺 五百羅漢図

修理と研究

石川登志雄[編]

「画聖」と称された室町期を代表する絵仏師・吉山明兆の超大作「五百羅漢図」。
大本山東福寺所蔵の47幅(45幅・附2幅)及び根津美術館所蔵の2幅についての16年の長期にわたる保存修理の成果とその下絵50幅、さらに長らく所在不明とされてきたが、近年、ロシア・エルミタージュ美術館に所蔵されていることが明らかになった第50号を大判のカラー図版により掲載。また、調査の過程により見出された新知見、装?修理における試行錯誤の成果を示した論考・コラム、諸種の資料も収載し、これまで全貌が未紹介であった東福寺五百羅漢図の研究に重要な材料を提供する。日本文化史・美術史・仏教史・文化財学をはじめ諸分野に益する瞠目すべき一書!

B4判上製・276頁・2023年10月刊行
978-4-585-37010-9・定価24200円(税込)

紫式部伝

平安王朝百年を見つめた生涯

上原作和[著]

紫式部はなぜ『源氏物語』を書いたのか。摂関期全盛の後宮を生き抜き、物語を通して、人生と社会の意味を問いかけたのが『源氏物語』である。その人と生涯を、清少納言や藤原道長、2人の夫など、紫式部をめぐる人々との関係を丹念にたどりながら明らかにする。紫式部の幼名・本名、恋愛と結婚、宮廷生活、職階、没年等について、先行研究を網羅的に検証しながら16の新見解を提示した本格評伝。和歌・漢文日記等に読みやすい現代語訳、専門用語に注記を付した。

A5判並製・416頁・2023年10月刊行
978-4-585-39035-0・定価5940円(税込)

物語る仏教絵画
童子・死・聖地

山本陽子［著］

日本中世において数多く制作された仏教絵画のなかで、類例のない図様を持ち、制作当時とは異なる名称で呼ばれたり、別の信仰の文脈で語られてきたりした経緯をもつ、特異な仏画が存在する。これらはどのような意図で制作され、何を意味しているのか。そして、なぜ多種多様な形態や伝説を持っているのか。とりわけ「童子・死・聖地」にまつわるこれらの仏画や垂迹画を丹念に読み解き、図像的特徴や成立背景、制作意図を明らかにする。さらに、これらの仏教絵画が制作された時点における、伝承や説話からの影響関係、受容の様相を探る。美術史学・説話文学・民俗学研究など隣接諸学に寄与する研究成果。

A5判上製・616頁・2023年10月刊行
978-4-585-37011-6・定価11000円（税込）

紙のレンズがひらく
古典籍・絵画の世界
New Aspect of Codicology,
under the eyes of the
Scientific Analysis of Paper

江南和幸・佐藤悟・横井孝［編］

古典籍や絵画、文書など、東アジアには紙を基底材とした文化財が数多く伝来している。そこで使用される紙は、原料や加工処理により、さまざまな表情を残している。これらの紙は、どのように作られ、選択され、流通したのか。文学的・書誌学的・文献学的研究と、高性能デジタル顕微鏡観察や蛍光X線分析による非破壊科学的分析研究とを一体とした「新コディコロジー」により、紙そのものが持つ情報と、その背景にある歴史・社会・経済・政治といった文化状況までもが明らかになりつつある。料紙研究の最先端を伝え、また、これからの課題をも提示する貴重な一冊。
掲載図版200点超！

A5判並製・284頁・2023年11月刊行
978-4-585-39036-7・定価4950円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
国文学

国宝「三十帖冊子」
修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

訂正新版
図説 書誌学
古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫［編］

有史以来蓄積されてきた「書物」は、人間の英知・思想・思考・情感といった精神活動が、最も明瞭に集約・表出されたかたちで伝承されてきた、学術文芸の遺産である。この「書物」は、なぜここにこのように存在するのか――。「書物」との真摯な対話により、過去から現在、そして未来へと連なる人間の知的営みの一端に自らリンクすることが出来るのである。昭和35年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。掲載図版270点以上！
※本書は『図説　書誌学』（ISBN978-4-585-20004-8、2010年12月刊行）の訂正新版です。

A4判並製・224頁・2023年11月刊行
978-4-585-30010-6・定価3850円（税込）

今昔物語集の怪異を読む

巻第二十七「霊鬼」

森正人［著］

古代日本人の思想・宗教・文化や生活をいまに伝える『今昔物語集』。そこには、幽霊、鬼、水や銅の精、狐などの霊力ある動物、格の低い神など、怪異を引き起こす異界の住人たちと人間との遭遇が活き活きと描かれている。天皇・后妃・宮廷貴族、それに仕える侍や女房、さらには兵（つわもの）、僧侶、平安京で生活を営む庶民、地方の猟師などさまざまの階層の人間が登場し、彼らの好奇、不安、恐怖、驚愕、安堵、得意、悲哀、後悔等がかたどられる。『今昔物語集』のうち、特に興味深い怪異を語る説話を集成した「本朝付霊鬼」巻に収録される四十五の物語について、読みやすい本文と注釈・考証・分析・批評を収録。

A5判並製・394頁・2023年12月刊行
978-4-585-39034-3・定価5280円（税込）

正訳 源氏物語 本文対照 第二冊

末摘花／紅葉賀／花宴／葵／賢木／花散里

中野幸一［訳］

第二冊は末摘花巻～花散里巻。光源氏十八歳～二十五歳の出来事。光源氏は、藤壺との間に不義の子（のちの冷泉帝）をもうけてしまった罪の意識に苦しめられながらも、紅葉賀巻・花宴巻と青春時代のハイライトを迎える。その後、桐壺院崩御、そして藤壺出家と、世の中が変わっていく中、朧月夜との密会発覚という決定的な出来事が起こる。巻末の論文では、物語の本筋とは関係がないが、その場面があることによって、より物語に深みと、奥行きをもたせる「かざり」と呼ばれる方法を解説する。

※『正訳源氏物語本文対照 第二冊』（ISBN9784585295723）（2016年1月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・正訳源氏物語本文対照2
A5判並製・352頁・2023年12月刊行
978-4-585-89572-5・定価2750円（税込）

正訳 源氏物語 本文対照 第三冊

須磨／明石／澪標／蓬生／関屋／絵合／松風

中野幸一［訳］

第三冊は須磨巻～松風巻。光源氏二十六歳～三十一歳の出来事。政敵右大臣の娘朧月夜との密会の露見により、須磨・明石で憂愁の日々を送る光源氏。しかしその地で明石の君と出会い、姫君を儲ける。やがて、帰京し政界に復帰した源氏は権大納言・内大臣と昇進して栄華をきわめてゆく。巻末の論文では、その場限りの設定で描かれた、または、結果的にそうなってしまった「一回性人物」の消滅と再生を紹介し、彼らが登場する意味について考察する。

※『正訳源氏物語本文対照 第三冊』（ISBN9784585295730）（2016年2月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・正訳源氏物語本文対照3
A5判並製・384頁・2023年12月刊行
978-4-585-89573-2・定価2750円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

中世醍醐寺と真言密教

藤井雅子［著］

醍醐寺は、真言密教の二大流派の一つである小野流を伝持する寺院として、今日まで法流を相承してきた。本書は、醍醐寺に所蔵される聖教や付法史料を広く博捜する中で、醍醐寺における寺院社会の内部構造を明らかにし、中世において如何に真言密教が展開し受容されてきたかを考察したものである。特に真言密教の存続を支える要件とされる「法流」「付法」「院家」をキーワードとして、宗教活動という寺院が本来属性として備えている機能や特性に注目する。
※『中世醍醐寺と真言密教』（978-4-585-03170-3）（2008年8月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・A5判並製・358頁・2023年1月刊行
978-4-585-83170-9・定価10780円（税込）

上海フランス租界への招待

日仏中三か国の文化交流

榎本泰子・森本頼子・藤野志織［編］

19世紀半ばから第二次世界大戦が終結するまでの約100年間、フランスの交易拠点として発展した「上海フランス租界」。この地にはフランス人のほか、革命を逃れてきた白系ロシア人、富裕層・知識層の中国人など、さまざまな国籍の人々が暮らし、豊かな文化・芸術が花開いた。「東洋のパリ」は、世界の人々を引きつけるとともに、中国や日本の文化を欧州に伝える役割も果たすようになる。上海フランス租界をフランス・中国・日本の三か国を結ぶ場と捉え、具体的な人物・事象を掘り下げることで、人々の暮らしから文化・芸術、政策・外交までを多角的に考察する。音楽、美術、文学、教育、メディアなどの幅広い視点から、フランス語新聞や未公刊資料などを多く用いて実証的に明らかにする、日本では初めての書。上海史、アジア近代史、日仏関係史、比較文学・比較文化、ポストコロニアル研究、グローバル文化史に一石を投じる意欲作。

アジア遊学279・A5判並製・304頁・2023年1月刊行
978-4-585-32525-3・定価3520円（税込）

01・02

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

03・04

明治・大正・昭和の時代劇メディアと時代考証

大石学・時代考証学会［編］

多くの記録が残され、我々の身近な人々が生きていた明治・大正・昭和。現在に近い時代を考証する困難性はどこにあるのか。そして、史実に沿うノンフィクションにおいても時代考証が求められるのはなぜか。
近現代史とノンフィクションにおける考証実務や作品の考察から、虚構と現実の間を埋めるという重要な役割を持つ「時代考証」がもつ可能性の広がりを考える。

A5判並製・416頁・2023年1月刊行
978-4-585-32025-8・定価3520円（税込）

古代日本の儀礼と音楽・芸能

場の論理から奏楽の脈絡を読む

平間充子［著］

7～10世紀の日本における音楽・芸能は、誰がいつどこでどのように行い、観て聴いたのか。人間の営みとしての音楽・芸能について、演奏と視聴という行為が繰り広げられた時間と空間＝「場」が、どのような論理のもとで機能していたのかを検証。正史・日記・儀式書などの記録類に見られる奏楽記事の精緻な読み解きや大陸音楽との比較を通して、奏楽が行われた儀礼の意義や展開をとらえるとともに、それぞれの場で選択された音楽や芸能の法則性（脈絡）や、君臣関係との結びつき、政治的・社会的意義を明らかにする。

A5判上製・320頁・2023年2月刊行
978-4-585-37006-2・定価11000円（税込）

禅寺の学問
相国寺・両足院の知の体系

編集部[編]

中世日本において禅宗寺院は、大陸からの最新の「知」を伝える場として、宗教のみならず、政治・文化を支える重要な「場」であった。なかでも相国寺や建仁寺両足院は、最先端の五山文学の中心地として、多くの碩学を輩出し、当時の「知」をめぐる状況をまざまざと伝える資料が、いまも大切に伝持・保存されている。相国寺承天閣美術館にて開催された「禅寺の学問―継承される五山文学」、そして、花園大学歴史博物館にて開催された「両足院―いま開かれる秘蔵資料」の成果をもとに、禅宗寺院が日本文化にもたらした「知」の体系を明らかにする。

書物学22・B5判並製・96頁・2023年2月刊行
978-4-585-30722-8・定価1980円(税込)

鎌倉時代禅僧喫茶史料集成

舘隆志[著]

茶の文化は禅と深く関わるものであり、近年はその価値への世界的評価の高まりとともに、研究も盛んになっている。なかでも茶を日本に伝えた栄西をはじめ、鎌倉時代の禅僧たちの史料は、禅と茶を語る上で避けては通れない。しかし、禅僧による史料は膨大であり、かつ難解なものが多く、これまで体系的な研究がなされてこなかった。鎌倉時代の禅僧の史料を博捜し、喫茶史料を抽出、書き下し・現代語訳および訳注、解説を付す。禅と茶の研究に新たな視座を提供する決定版史料集。

A5判上製・784頁・2023年2月刊行
978-4-585-31014-3・定価14850円(税込)

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

日ソ戦争史の研究

日ソ戦争史研究会[編]

第二次世界大戦末期の1945年8月、日本とソ連との戦争は勃発した。日ソ戦は短期間のものではあったが、戦後の東アジア国際関係に大きな影響を及ぼした。シベリア抑留や北方領土問題など戦後処理が長期にわたり、戦後日本史を考えるうえでも重要な構成要素となっている。それにもかかわらず、日ソ戦争は、日本の歴史学界においてこれまでほとんど注目されておらず、日本近現代史の通史のなかでもふれるものは少なかった。本書では、日本史、ロシア史、中国史、モンゴル史、現代政治におよぶ多面的考察により、日ソ戦争史の全体像、そして、北東アジア規模のグローバル・ヒストリーとしての日ソ戦争の位置づけを明らかにし、今後の現代史研究の礎を提供する。

A5判上製・512頁・2023年2月刊行
978-4-585-32026-5・定価13200円(税込)

伝承と現代
民俗学の視点と可能性

加藤秀雄[著]

伝承は消滅しつつある――諦念を含みこんだこの語りを耳にすることは多い。そこには、伝承は旧来のあり方を保存したまま持続すべきであるという意識が横たわっている。しかし、伝承とは、そもそも不変で静態的な存在なのであろうか。伝えていく行為とその主体への視点から、伝承を変わりゆく動態的なものと捉え返し、人びとの生活世界における伝承の実態を子細に分析することにより、現代における伝承の力を問い直す視点を提供する意欲作。

A5判上製・368頁・2023年2月刊行
978-4-585-33004-2・定価8800円(税込)

江戸時代前期出版年表
〔万治元年～貞享五年〕

岡 雅彦［編］

出版文化の華開いた万治元年から貞享五年の三十年間に、どのような本が刷られ、読まれていたのか。江戸文化を記憶し、今に伝える版本の情報を網羅掲載。万治元年（1658）から貞享五年（1688）の30年間に刊行されたあらゆる出版物の総合年表。掲載件数8700点超！（当該期刊行版本の後印を含む）
広大な江戸時代の出版文化の黎明期を映し出し、近世文化研究の基盤として好評を博した『江戸時代初期出版年表〔天正十九年～明暦四年〕』（2011年）の待望の続編、公刊！

B5判上製・1184頁・2023年2月刊行
978-4-585-32029-6・定価35200円（税込）

都市と宗教の東アジア史

西本昌弘［編］

中国の長安・洛陽、高句麗の平壌、百済の漢城、新羅の慶州、琉球の首里、ベトナムのハノイ、日本の奈良・京都・鎌倉・博多……東アジアには古代より様々な都市があった。これらの都市には、王権・社会の安寧や繁栄を祈り、民衆の除災・追福を願う重要な場として、宗教を基盤とした祭祀施設がつくられていた。東アジアにおける国家間、諸文化間の交流は、それら祭祀施設にどのような影響を与え、どのような変化をもたらしたのか。また、王権や公武政権をはじめとする社会諸集団はどのように変化に対応し、受容していったのか。考古学・文献史学・宗教史・美術史・東洋史など様々な視点から、東アジアの都市と宗教・祭祀の問題を捉え直す。

アジア遊学280・A5判並製・240頁・2023年2月刊行
978-4-585-32526-0・定価3300円（税込）

深草瑞光寺所蔵 元政上人資料集
近世京洛寺院の学問とネットワーク

岡雅彦・落合博志・桑名法晃・長田和也・中前正志・那須陽一郎・原雅子・村木敬子［編］

17世紀を代表する文人僧として日本文化史に巨大な足跡を遺した深草元政上人（1623～1668）。その遺業は中世から近世に至る移行期の日本文化の実態を解明する上で詳細に分析されるべきものである。京都市伏見区深草の元政庵瑞光寺にのみ所蔵される元政上人自筆資料を中心に、彼を取り巻く文人たちの写本資料も併せて翻刻紹介。江戸時代の文化・歴史研究のみならず中世文学や日本仏教学とも繋がりを持つ、膨大かつ貴重な新出資料集として日本研究に幅広く資する。

B5判上製・648頁・2023年3月刊行
978-4-585-31013-6・定価22000円（税込）

神道の近代
アクチュアリティを問う

伊藤聡・斎藤英喜［編］

現代に息づく神道。それは政治性や民族性とどのように結びついて展開してきたのか。中世・近世神道と、近代神道はどう違うのか。国家と神道との繋がり、神社神道と、国体や国民道徳論との関係、霊学・異端神道など神道系新宗教の宗教史的意義、学者や知識人による学問としての神道の在り方など多角的に考察。古代の神祇信仰、中世神道、近世国学の研究視角から近代の神道をめぐる諸課題について問い直す。従来のイデオロギー的な国家神道論や護教的神道研究を超えて、神道の多元的で複雑な構造を明らかにした画期的成果。

アジア遊学281・A5判並製・280頁・2023年3月刊行
978-4-585-32527-7・定価3520円（税込）

黄泉の国との契約書
東アジアの買地券

稲田奈津子・王海燕・榊佳子［編著］

東アジアの墓葬遺構からは、「買地券」と呼ばれる遺物が発見されることがある。これは死者や遺族が、墓地を正当に購入したことを示す売買契約書であり、その多くは冥界の神々と結んだ契約なのである。古代中国に源を発し、朝鮮半島や日本でもその遺例が発見されている「買地券」は、時代・地域により様々な特徴を有し、東アジアの文化交流史を考えるうえで貴重な資料である。中国・朝鮮・日本に残る特色ある事例を多数のカラー図版とともに紹介、詳細な解説と釈文・現代語訳によって「黄泉の国との契約書」という不思議な存在を読み解く初めての書。図版点数210点以上！

B5判並製・240頁・2023年3月刊行
978-4-585-32030-2・定価4180円（税込）

グレーゾーンと帝国
歴史修正主義を乗り越える生の営み

髙綱博文・門間卓也・関智英［編］

〈加害／被害〉の二分法で捉えられない人びとの姿を「グレーゾーン（灰色の領域）」と呼んだアウシュヴィッツの生存者である作家プリーモ・レーヴィ。その思想に触発され、第二次大戦期の日独「帝国」下に現れた統治空間を新視角から注目し、「協力者」の実像解明に取り組む歴史学の新たな潮流。本書は戦時社会を基底から問い直すことで、意図的な歴史の忘却と「修正」に対峙する、西洋史と東洋史の垣根を超えた共同研究の成果である。
戦時期の「抵抗と協力のあいだ」（グレーゾーン）に生まれた歴史的現象について、最新の研究成果を交えて、地域横断的に比較分析。巻末に、本書で取り上げた歴史的事象を網羅的に見ることができる関連年表を掲載。

A5判上製・536頁・2023年3月刊行
978-4-585-32027-2・定価5720円（税込）

モノと権威の東アジア交流史
鑑真から清盛まで

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア［著］

古代東アジアにおいて、対外交易はごく限られた機会のものであったが、それだけに一層、各国の政治や文化の形成に大きなインパクトを与えてきた。特に日本においては、中国や朝鮮半島から伝わる最新の情報やモノは、権威の象徴としても重要な位置を占めるものであった。「モノ」「ヒト」「情報」など諸種の要素を仔細に検討することで、政治・経済・文化にわたる重層的な「対外交易」の実態と歴史的意義を照射。物質文化史・対外関係史・農業史・比較史など多角的な視点を駆使し、従来の歴史理解へ新たな観点を提示してきた著者による、長編の書き下ろしを含む最新論集。

四六判上製・368頁・2023年5月刊行
978-4-585-32022-7・定価5280円（税込）

江戸時代の貸本屋
庶民の読書熱、
馬琴の創作を支えた書物流通の拠点

長友千代治［著］

江戸時代には書物を読むことのできる人びとが庶民にまで広がった。その読書熱を支えた書物流通の拠点が貸本屋である。読者の興味をそそり、見たことのない世界や名所旧跡へ連れ出す書物、隠された秘密や真相を解き明かす書物、便利性に満ちた生活実用書――。これらをすぐに調えて手元に届けるのが貸本屋であった。また、読書熱の高まり、さまざまなジャンルにわたる出版文化の広がりは、近世における創作の場においても、大きな影響を与えた。特にその浩瀚な知識を自らの作品に注ぎ込んできた近世を代表する作家・曲亭馬琴の日記には、近世知識人と書物の関係をまざまざと伝える、特筆すべき内容がふんだんに含まれている。
長年にわたり諸資料を博捜してきた筆者が、江戸時代の貸本屋の展開、そして、書物と人びととのかかわりの諸相を描き出す書籍文化史論。

A5判上製・336頁・2023年5月刊行
978-4-585-39029-9・定価5500円（税込）

霊峰の文化史
世界遺産・富士山と世界の山岳信仰

秋道智彌［著］

信仰の対象とされ、さまざまな神話を持ち、その土地独自の方法で祀られる「霊峰」。屹立する雪山や秀麗な裾野をもつ山、苔むす鬱蒼とした山中の幽谷、奇岩の露出する異形の山塊は、自然そのものへの感動と魅力以上に人びとを非日常の世界にいざなってきた。神が自然物の山や大きな岩に宿るとする認識はどのようにして生まれたのか。ヒトは山をみて何を感じ、山から受ける恩恵や災禍をどのように受け止めてきたのか。
世界遺産となった富士山、立山、白山などの日本の山のみならず、エヴェレストやキリマンジャロ、アグン、カイラス山、廬山、黄山など世界各地の「霊峰」と呼ばれる山やまを、多数の図版とともに解説。
ヒトが山に込める想いを解き明かす。

A5判並製・360頁・2023年5月刊行
978-4-585-33005-9・定価3520円（税込）

列島の中世地下文書
諏訪・四国山地・肥後

春田直紀［編］

中世の地域社会（地下）で生成され機能した「地下文書」。東国諏訪の社家、四国山地の名主、九州肥後の大百姓・殿原など地域も伝来主体も異なる文書群を検討するなかで、中世地下文書の多様性を列島規模で把握しつつ、文書群がタテ・ヨコの関係で集積され伝来していった様相を原本調査の成果をふまえて描き出す。さらに、金石文や仏像銘文といった紙以外の文字史料も地下の観点から再検討し、地下文書論の地平を広げる。

アジア遊学282・A5判並製・272頁・2023年5月刊行
978-4-585-32528-4・定価3300円（税込）

古文書研究
第95号

日本古文書学会［編］

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

◉収録
論文＝永禄・天正期九州の争乱と秋月種実（中村知裕）▼研究ノート＝（五十一という神話：御成敗式目と十七条憲法）佐藤雄基　北畠親房の〈僧上〉について（村井章介）　「斑鳩旧記類集」からみる南北朝期室町幕府の謀書判定手続き（山本康司）　中世後期法隆寺（竹内惇人）　豊臣政権下における長岡藤孝の動向（谷橋啓太）▼史料紹介＝「地蔵院殿御灌頂記」について（伴瀬明美）▼追悼文＝柴辻俊六先生のお仕事と思い出（須藤茂樹）▼古文書めぐり＝成城大学民俗学研究所の所蔵資料（林洋平）▼研究余滴＝徳川家康の左京大夫任官はいつか（遠藤珠紀）

B5判並製・162頁・2023年7月刊行
978-4-585-32405-8・定価4180円（税込）

地方史誌から世界史へ
比較地方史誌学の射程

小二田章［編］

地方を歴史的に描く総合的書物、「地方史誌」。
これらの書物は、世界的に存在し、歴史の産物として、それぞれの地域・国家のアイデンティティと強固に結びつき、伝えられてきた。「ある地方（地域）を描くこと」という人間の普遍的営みに着目し、各地域の地方史誌形成・再解釈における歴史的展開を検討・比較。地域・領域を越えて、相互の関係性を検討するための視角を提示する画期的な一書。

A5判上製・336頁・2023年6月刊行
978-4-585-32028-9・定価8800円（税込）

東アジアの後宮

伴瀬明美・稲田奈津子・榊佳子・保科季子［編］

皇帝・国君の妻妾が住まい、再生産が行われる場である「後宮」。ドラマや漫画、ゲームなどにもたびたび取り上げられ、今なお人々の関心を集めるが、その実態は、国・時代によって変化し、多様性に富んでいた。
「後宮制度」の規範となり、儒教に基づく礼制に即しつつも、理念と現実の間で揺れ動き、また民族や時代によって変化し続けた中国。中国礼制を積極的に受容しつつも独自性を色濃く残した朝鮮。天皇だけでなく武家政権にも〈後宮〉が設けられるなど、独自路線をひた走った日本。日中韓のみで語られがちな「東アジア」という枠組みを相対化するインパクトを有する大越・琉球。中国、朝鮮、日本やその他の各地域において、後宮のあり方、後宮を構成する人々（妃嬪、女官、宦官など）の制度、儀礼、文化、日常の実態などを幅広く考察し、東アジアの後宮における共通性と多様性に迫る。

アジア遊学283・A5判並製・344頁・2023年6月刊行
978-4-585-32529-1・定価3520円（税込）

機巧の文化史 異聞

海を渡った三台のからくり人形

村上和夫［著］

「ジャパニーズペインター」と呼ばれる江戸時代のからくり人形は、なぜ異国に渡ったのか。からくり師、時計師、天文家、マジシャン、コレクター……交錯する人物たち。わずかな痕跡を残し消えた高度なからくり人形の謎に迫るため、近代的エンジニアの先駆け田中久重の生涯を足がかりに、からくり製作の歴史と文化創造の過程を丹念に追った一冊。貴重なからくり人形の写真を含む、約100枚の図版を掲載！

A5判上製・368頁・2023年8月刊行
978-4-585-32031-9・定価4950円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

近世日本のキリシタンと異文化交流

大橋幸泰［編］

十六世紀に日本にもたらされたキリスト教とヨーロッパの文化・思想は、既存の文化や思想にどのようなインパクトをもたらしたのか。日本のキリシタン禁制はどのように始まり、どのように終わったのか。中国や朝鮮、東南アジアの布教はどのように展開し、日本布教とどう関わったのか。東アジア世界におけるキリシタンをめぐる異文化の融合と摩擦の問題を、内外の一次史料を用いて日本史・東洋史・西洋史・科学史・思想史・言語学の各方面から検討し、中世末期から近世期の新たな時代像の構築を目指す。

アジア遊学284・A5判並製・256頁・2023年7月刊行
978-4-585-32530-7・定価3080円（税込）

渾沌と革新の明治文化

文学・美術における新旧対立と連続性

井上泰至［編］

明治期の近代化の波は、旧来の和歌・俳句・漢詩・演劇・美術など文芸に関する諸ジャンルにも及んだ。これら諸ジャンルは、小説を中心とする新しいメディアや技法の展開とも関わりつつ、相互に絡み合い、新たな時代における「あるべき姿」をそれぞれに模索していった。「旧きもの」と「新しきもの」の相克と渾沌から見える〈可能性〉とは何か。
「カオス」そのものに文化の「所在」を見すえる新たな視点を提示する。

アジア遊学285・A5判並製・240頁・2023年8月刊行
978-4-585-32531-4・定価3080円（税込）

書物の時代の宗教
日本近世における神と仏の変遷

岸本覚・曽根原理［編］

日本近世の宗教は、出版文化の発達により大きな転換を迎える。中世までの写本の時代と異なり、木版・整版による出版が商業的に発達し、明治以降の洋式活字出版の時代とも異なる、一つの時代が形成されたのである。そのような流れの中で、仏神のイメージや宗教環境はどのように変化したのか。民間のカミ、為政者たちが崇める仏神、そして東照宮を頂点とする国家の宗教体系は、近世社会とどのような関わりを持ったのか。
書物との関係を射程に入れて、社会情勢や文化現象の中で揺れ動く宗教の姿を読み解く。

アジア遊学287・A5判並製・272頁・2023年8月刊行
978-4-585-32533-8・定価3080円（税込）

日本人の読書
古代・中世の学問を探る

佐藤道生［著］

古代・中世の日本において、書物を読み、解釈し、伝えていくことは、限られた人びとにのみ許される特権的な営みであった。中国の文化全般を学ぶことを目的とした学問――漢学――は、国家の制度のなかにも位置付けられ、それを担う家では、書写・刊行された諸種の漢籍を入手し、独自の学問を形成していった。書物に残された注釈の書き入れ、来歴を伝える識語、古記録や説話に残された漢学者の逸話など、漢籍の読書の高まりをいまに伝える諸資料から古代・中世における日本人の読書の歴史を明らかにする。

本書ではじめてフルカラー公開する資料――『清涼山伝』・『文選集注』巻七断簡・『文選集注』巻百十一断簡・金澤文庫本『文選集注』巻六十一残簡・「佐保類切」『施氏七書講義』断簡・「佐保類切」『施氏七書講義』残簡・「道徳経切」『老子道徳経』断簡

A5判上製・520頁・2023年9月刊行
978-4-585-39033-6・定価13200円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

重要文化財
東福寺 五百羅漢図
修理と研究

石川登志雄［編］

「画聖」と称された室町期を代表する絵仏師・吉山明兆の超大作「五百羅漢図」。
大本山東福寺所蔵の47幅（45幅・附2幅）及び根津美術館所蔵の2幅についての16年の長期にわたる保存修理の成果とその下絵50幅、さらに長らく所在不明とされてきたが、近年、ロシア・エルミタージュ美術館に所蔵されていることが明らかになった第50号を大判のカラー図版により掲載。また、調査の過程により見出された新知見、装?修理における試行錯誤の成果を示した論考・コラム、諸種の資料も収載し、これまで全貌が未紹介であった東福寺五百羅漢図の研究に重要な材料を提供する。日本文化史・美術史・仏教史・文化財学をはじめ諸分野に益する瞠目すべき一書！

B4判上製・276頁・2023年10月刊行
978-4-585-37010-9・定価24200円（税込）

永平廣録 大全
『祖山本 永平廣録』訓読・訳註・補注参究ならびに解題・関連資料集成

大谷哲夫［著］

道元禅師（1200～1253）の語録として主要な撰述著作は和語による『正法眼蔵』であることは周知の事実である。
しかし、それとは別にその説法説示を漢文体で十巻に編纂されたものが、通称『永平広録』と呼ばれ、道元の語録として存在していることは、『正法眼蔵』ほどには知られていない。
本書では、原本『祖山本　永平廣録』（全十巻）の正確な「訓読」と「訳」を提供する。また、その語句に対する「語義注釈」、「出典考証」、各項の解説、さらに語義の詳細にわたる「補注参究」、本書に関連する「基本的原典」等の関連書ならびに関連項目の小論・解題等も収載した決定版。

B5判上製・3000頁・2023年12月刊行
978-4-585-31017-4・定価71500円（税込）

東アジアの王宮・王都と仏教

堀裕・三上喜孝・吉田歓［編］

前近代東アジアにおける王宮・王都は、豊かな交流のあり様を示す多くの共通性がみられる一方、時期や地域によって注目すべき大きな相違が存在する。
これまで考古学や文献史学により、その諸相が明らかになってきてはいるが、宗教行事に関する比較研究は一部の行事を除けば立ち遅れている。
六世紀から十一世紀にかけての東アジアにおける王宮と王都の比較宗教史研究を通して、東アジア世界における、それぞれの「王権」の特色を示すことで、今後の研究を牽引する画期的な一書。

A5判上製・480頁・2023年10月刊行
978-4-585-32032-6・定価13200円（税込）

東アジアの「孝」の文化史

前近代の人びとを支えた価値観を読み解く

雋雪艶・黒田彰［編］

中国をはじめとする東アジアの文明の歴史において重要な役割を果たし、かつては東アジアの人々にとって最も重要な価値観、行動規範であった、「孝」という思想と文化。東アジア各国において伝承された「孝」は、歴史や文化的背景によって異なり、様々な形で表象されてきた。考古学の文物や文献および敦煌の文書などの重要な一次資料にはどのような形で残されてきたのか。
孝の文化は仏教とどのように融合して、変化したのか。また、日本の説話、和歌、謡曲、絵画などではどのように表現されてきたのか。社会史、思想史、文学史、美術史など多領域に散見される「孝」という文化が、長い歴史の中で果たしてきた役割を客観的に認識し、学際的な視点から考察する。

アジア遊学288・A5判並製・336頁・2023年10月刊行
978-4-585-32534-5・定価3520円（税込）

物語る仏教絵画

童子・死・聖地

山本陽子［著］

日本中世において数多く制作された仏教絵画のなかで、類例のない図様を持ち、制作当時とは異なる名称で呼ばれたり、別の信仰の文脈で語られてきたりした経緯をもつ、特異な仏画が存在する。これらはどのような意図で制作され、何を意味しているのか。そして、なぜ多種多様な形態や伝説を持っているのか。とりわけ「童子・死・聖地」にまつわるこれらの仏画や垂迹画を丹念に読み解き、図像的特徴や成立背景、制作意図を明らかにする。さらに、これらの仏教絵画が制作された時点における、伝承や説話からの影響関係、受容の様相を探る。美術史学・説話文学・民俗学研究など隣接諸学に寄与する研究成果。

A5判上製・616頁・2023年10月刊行
978-4-585-37011-6・定価11000円（税込）

海外の日本中世史研究

「日本史」・自国史・外国史の交差

黄 霄龍・堀川康史［編］

日本中世史は、日本人研究者による「自国史」研究としてだけでなく、海外においても、日本とは異なる文化的・学術的背景のもとで精力的に研究が進められ、独自の発展を遂げている。しかし、これらの日本・海外におけるそれぞれの研究成果が有機的に結びついているかとなると、必ずしもそうではない。日本・海外研究者の双方向的な交流を実現し、それぞれの関心・方法論・成果に対する理解を深めることは、日本・海外における日本史研究の新たな展開・可能性を探るうえで有意義な試みになるのではないか。海外における日本中世史研究に対する理解を深め、今後どのようにして両者の有機的な交流を実現し継続していくのかについて議論することで、日本史研究の未来を考える。

アジア遊学289・A5判並製・304頁・2023年11月刊行
978-4-585-32535-2・定価3520円（税込）

国宝「三十帖冊子」修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

女性の力から歴史をみる

柳田国男「妹の力」論の射程

永池健二［編］

女性の霊的な力や心的な影響力の意義を論じた柳田国男の「妹の力」論。この思想は近年、女性史・女性学研究の立場からさまざまな批判が繰り返されている。家庭内での女性の大きな役割や、その前提となる女性の男性に対する霊的優位性を否定し、「妹の力」の歴史的存在そのものをも認めまいとする主張もある。しかし、必ずしも柳田の主張が正しく理解されてきたとはいいがたい。柳田は「妹の力」にどのような意図や主張を込めたのだろうか。改めて時代状況のなかに置き直して考察するとともに、沖縄の「オナリ神」信仰や女性祭司と巫女、遊女、長崎のかくれキリシタン、中国古代の敦煌など、時代地域を異にする女性たちが担った独自の信仰の事例を多数提示し、女性の霊的な優位性を再検証する。「妹の力」を男女の関係や現代社会のあり方を捉えなおす視座として提示するとともに、個人的な生にとって意義のある歴史の構築を目指した柳田国男の民俗学を問い直す画期的成果。

アジア遊学290・A5判並製・280頁・2023年11月刊行
978-4-585-32536-9・定価3300円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
日本史

増補改訂

江戸の異性装者たち

セクシュアルマイノリティの理解のために

長島淳子［著］

性規範のもとで葛藤・苦悩する人々。男装を禁止されても止めず遠島に処された女、女装姿で貸金業を営み女に求婚した男、男同士の夫婦、陰間茶屋で男色に従事する美少年たち―。社会規範からの逸脱の実態を記録した事件史料を読み解く。第五章として、「セクシュアルマイノリティ研究の現在」の一章を増補し、装いを新たに刊行！

※本書は『江戸の異性装者たち』（ISBN978-4-585-22198-2、2017年11月刊行）の増補改訂版です。

四六判並製・312頁・2023年12月刊行
978-4-585-32033-3・定価3520円（税込）

古文書研究

第96号

日本古文書学会［編］

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

B5判並製・162頁・2023年12月刊行
978-4-585-32406-5・定価4180円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
東洋史・東洋文化

上海フランス租界への招待
日仏中三か国の文化交流

榎本泰子・森本頼子・藤野志織［編］

19世紀半ばから第二次世界大戦が終結するまでの約100年間、フランスの交易拠点として発展した「上海フランス租界」。この地にはフランス人のほか、革命を逃れてきた白系ロシア人、富裕層・知識層の中国人など、さまざまな国籍の人々が暮らし、豊かな文化・芸術が花開いた。「東洋のパリ」は、世界の人々を引きつけるとともに、中国や日本の文化を欧州に伝える役割も果たすようになる。上海フランス租界をフランス・中国・日本の三か国を結ぶ場と捉え、具体的な人物・事象を掘り下げることで、人々の暮らしから文化・芸術、政策・外交までを多角的に考察する。音楽、美術、文学、教育、メディアなどの幅広い視点から、フランス語新聞や未公刊資料などを多く用いて実証的に明らかにする、日本では初めての書。上海史、アジア近代史、日仏関係史、比較文学・比較文化、ポストコロニアル研究、グローバル文化史に一石を投じる意欲作。

アジア遊学279・A5判並製・304頁・2023年1月刊行
978-4-585-32525-3・定価3520円（税込）

都市と宗教の東アジア史

西本昌弘［編］

中国の長安・洛陽、高句麗の平壌、百済の漢城、新羅の慶州、琉球の首里、ベトナムのハノイ、日本の奈良・京都・鎌倉・博多……東アジアには古代より様々な都市があった。これらの都市には、王権・社会の安寧や繁栄を祈り、民衆の除災・追福を願う重要な場として、宗教を基盤とした祭祀施設がつくられていた。東アジアにおける国家間、諸文化間の交流は、それら祭祀施設にどのような影響を与え、どのような変化をもたらしたのか。また、王権や公武政権をはじめとする社会諸集団はどのように変化に対応し、受容していったのか。考古学・文献史学・宗教史・美術史・東洋史など様々な視点から、東アジアの都市と宗教・祭祀の問題を捉え直す。

アジア遊学280・A5判並製・240頁・2023年2月刊行
978-4-585-32526-0・定価3300円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
東洋文化
東洋史

鎌倉時代禅僧喫茶史料集成

舘隆志［著］

茶の文化は禅と深く関わるものであり、近年はその価値への世界的評価の高まりとともに、研究も盛んになっている。なかでも茶を日本に伝えた栄西をはじめ、鎌倉時代の禅僧たちの史料は、禅と茶を語る上で避けては通れない。しかし、禅僧による史料は膨大であり、かつ難解なものが多く、これまで体系的な研究がなされてこなかった。鎌倉時代の禅僧の史料を博捜し、喫茶史料を抽出、書き下し・現代語訳および訳注、解説を付す。禅と茶の研究に新たな視座を提供する決定版史料集。

A5判上製・784頁・2023年2月刊行
978-4-585-31014-3・定価14850円（税込）

禅寺の学問
相国寺・両足院の知の体系

編集部［編］

中世日本において禅宗寺院は、大陸からの最新の「知」を伝える場として、宗教のみならず、政治・文化を支える重要な「場」であった。なかでも相国寺や建仁寺両足院は、最先端の五山文学の中心地として、多くの碩学を輩出し、当時の「知」をめぐる状況をまざまざと伝える資料が、いまも大切に伝持・保存されている。相国寺承天閣美術館にて開催された「禅寺の学問―継承される五山文学」、そして、花園大学歴史博物館にて開催された「両足院―いま開かれる秘蔵資料」の成果をもとに、禅宗寺院が日本文化にもたらした「知」の体系を明らかにする。

書物学22・B5判並製・96頁・2023年2月刊行
978-4-585-30722-8・定価1980円（税込）

文と書
中国書字思想の探究

亀澤孝幸［著］

近代以前の中国において、「書」は文学や絵画と並ぶ最高の芸術とみなされていた。文字をつかさどることは世界の統治と同等の意味を有し、この根源的な政治性とあいまって、文字や言葉を記す「書」は中国文化における重要な地位を占めるに至った。書論のみならず文字学、言語哲学、文学論、画論など文字や書くことに関する諸種のテクストを相互に接続、交差させることで、「文字を書くこと」に関する思想――書字思想の体系を明らかにする。近代以降に形成された造形芸術としての片面的な評価を改め、「書字」という人間の普遍的な営みから「書」の意義を捉えかえす意欲作。

A5判上製・288頁・2023年3月刊行
978-4-585-37008-6・定価8800円（税込）

二一世紀の川劇
文化資源化の視点から

江玉［著］

お面が一瞬で入れ替わる「変面」で知られる、中国四川省を代表する伝統劇・川劇。2006年に中国の非物質文化遺産（無形文化財）に登録された川劇は、政治や社会とどのようにかかわり展開・変容してきたのか。現代における役割・意義とは何か。作品のテーマ性や芸術性の比較検討、商業公演のもたらす経済効果、教授・学習の実体、時代に翻弄された役者たちの苦悩など、多角的に分析。中国文化遺産「変面」継承者である著者が、経済・政治・教育の文脈において文化資源化されている川劇の動態を、実体験を交えつつ文献調査やフィールドワークを用いて論じた貴重な成果。詳細な歴史的展開を概説した「付録　四川省と川劇の歴史」を付す。

【本書の特色】・経済・政治・教育の3視点から現代川劇の意義・役割を明らかにする。・川劇の歴史的展開を知ることができる。・華やかな川劇の舞台写真60点をカラー掲載。

A5判上製・224頁・2023年3月刊行
978-4-585-37007-9・定価7480円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
東洋文化
東洋史

黄泉の国との契約書
東アジアの買地券

稲田奈津子・王海燕・榊佳子［編著］

東アジアの墓葬遺構からは、「買地券」と呼ばれる遺物が発見されることがある。これは死者や遺族が、墓地を正当に購入したことを示す売買契約書であり、その多くは冥界の神々と結んだ契約なのである。古代中国に源を発し、朝鮮半島や日本でもその遺例が発見されている「買地券」は、時代・地域により様々な特徴を有し、東アジアの文化交流史を考えるうえで貴重な資料である。中国・朝鮮・日本に残る特色ある事例を多数のカラー図版とともに紹介、詳細な解説と釈文・現代語訳によって「黄泉の国との契約書」という不思議な存在を読み解く初めての書。図版点数210点以上！

B5判並製・240頁・2023年3月刊行
978-4-585-32030-2・定価4180円（税込）

杜甫研究年報
第六号

日本杜甫学会［編］

「詩聖」杜甫。その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

杜甫研究年報6・A5判並製・176頁・2023年4月刊行
978-4-585-39446-4・定価3300円（税込）

輞川図と蘭亭曲水図
イメージとテクストの交響

野田麻美・静岡県立美術館［編］

東アジアにおける文学・書・画の世界を考えるうえで、とりわけ重厚な二つの画題――「輞川図」と「蘭亭曲水図」。文人画の祖とされる王維、書聖として崇められる王羲之にまつわる故事を絵画化するなかで、園林を舞台とする文人たちの交流はいかにして描かれ、その風景表現はどのように展開したのか。
2021年に修理を終えた静岡県立美術館所蔵の「輞川図巻」をはじめ、近年注目を集める「蘇州片」や、久隅守景、池大雅、富岡鉄斎らの優品など、中国と日本、そして、宋代から近代に至るまでの王維・王羲之イメージを精査・検討。
諸分野の第一線の研究者による論考とカラー図版を含む120点超の書画資料より、イメージとテクストの連環が織りなすダイナミックな世界を照らし出す。

A5判上製・304頁・2023年4月刊行
978-4-585-37009-3・定価10450円（税込）

モノと権威の東アジア交流史
鑑真から清盛まで

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア［著］

古代東アジアにおいて、対外交易はごく限られた機会のものであったが、それだけに一層、各国の政治や文化の形成に大きなインパクトを与えてきた。特に日本においては、中国や朝鮮半島から伝わる最新の情報やモノは、権威の象徴としても重要な位置を占めるものであった。「モノ」「ヒト」「情報」など諸種の要素を仔細に検討することで、政治・経済・文化にわたる重層的な「対外交易」の実態と歴史的意義を照射。物質文化史・対外関係史・農業史・比較史など多角的な視点を駆使し、従来の歴史理解へ新たな観点を提示してきた著者による、長編の書き下ろしを含む最新論集。

四六判上製・368頁・2023年5月刊行
978-4-585-32022-7・定価5280円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
東洋文化
東洋史

霊峰の文化史
世界遺産・富士山と世界の山岳信仰

秋道智彌［著］

信仰の対象とされ、さまざまな神話を持ち、その土地独自の方法で祀られる「霊峰」。屹立する雪山や秀麗な裾野をもつ山、苔むす鬱蒼とした山中の幽谷、奇岩の露出する異形の山塊は、自然そのものへの感動と魅力以上に人びとを非日常の世界にいざなってきた。神が自然物の山や大きな岩に宿るとする認識はどのようにして生まれたのか。ヒトは山をみて何を感じ、山から受ける恩恵や災禍をどのように受け止めてきたのか。
世界遺産となった富士山、立山、白山などの日本の山のみならず、エヴェレストやキリマンジャロ、アグン、カイラス山、廬山、黄山など世界各地の「霊峰」と呼ばれる山やまを、多数の図版とともに解説。
ヒトが山に込める想いを解き明かす。

A5判並製・360頁・2023年5月刊行
978-4-585-33005-9・定価3520円（税込）

中国古典をどう読むか
規範からの逸脱、規範への回帰

下定雅弘［著］

中国の作家たちは儒教倫理とつきあいながら人間の真実を表現してきた。フェティッシュな表現に男の愛を託した陶淵明の「閑情賦」、愛する女との別れを語った元稹の「鶯鶯伝」、女性のすさまじい性欲を描いた柳宗元の「河間伝」など…。古来、解釈が定まらない古典作品を、「規範からの逸脱、規範への回帰」という創作手法を鍵として再解釈。その真の主題、作家としての姿勢・戦術を解き明かす。

A5判並製・248頁・2023年6月刊行
978-4-585-39027-5・定価4180円（税込）

東アジアの後宮

伴瀬明美・稲田奈津子・榊佳子・保科季子［編］

皇帝・国君の妻妾が住まい、再生産が行われる場である「後宮」。ドラマや漫画、ゲームなどにもたびたび取り上げられ、今なお人々の関心を集めるが、その実態は、国・時代によって変化し、多様性に富んでいた。
「後宮制度」の規範となり、儒教に基づく礼制に即しつつも、理念と現実の間で揺れ動き、また民族や時代によって変化し続けた中国。中国礼制を積極的に受容しつつも独自性を色濃く残した朝鮮。天皇だけでなく武家政権にも〈後宮〉が設けられるなど、独自路線をひた走った日本。日中韓のみで語られがちな「東アジア」という枠組みを相対化するインパクトを有する大越・琉球。中国、朝鮮、日本やその他の各地域において、後宮のあり方、後宮を構成する人々（妃嬪、女官、宦官など）の制度、儀礼、文化、日常の実態などを幅広く考察し、東アジアの後宮における共通性と多様性に迫る。

アジア遊学283・A5判並製・344頁・2023年6月刊行
978-4-585-32529-1・定価3520円（税込）

日本人の読書

古代・中世の学問を探る

佐藤道生［著］

古代・中世の日本において、書物を読み、解釈し、伝えていくことは、限られた人びとにのみ許される特権的な営みであった。中国の文化全般を学ぶことを目的とした学問――漢学――は、国家の制度のなかにも位置付けられ、それを担う家では、書写・刊行された諸種の漢籍を入手し、独自の学問を形成していった。書物に残された注釈の書き入れ、来歴を伝える識語、古記録や説話に残された漢学者の逸話など、漢籍の読書の高まりをいまに伝える諸資料から古代・中世における日本人の読書の歴史を明らかにする。

本書ではじめてフルカラー公開する資料――『清涼山伝』・『文選集注』巻七断簡・『文選集注』巻百十一断簡・金澤文庫本『文選集注』巻六十一残簡・「佐保類切」『施氏七書講義』断簡・「佐保類切」『施氏七書講義』残簡・「道徳経切」『老子道徳経』断簡

A5判上製・520頁・2023年9月刊行
978-4-585-39033-6・定価13200円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
東洋文化
東洋史

東アジアの王宮・王都と仏教

堀裕・三上喜孝・吉田歓［編］

前近代東アジアにおける王宮・王都は、豊かな交流のあり様を示す多くの共通性がみられる一方、時期や地域によって注目すべき大きな相違が存在する。
これまで考古学や文献史学により、その諸相が明らかになってきてはいるが、宗教行事に関する比較研究は一部の行事を除けば立ち遅れている。
六世紀から十一世紀にかけての東アジアにおける王宮と王都の比較宗教史研究を通して、東アジア世界における、それぞれの「王権」の特色を示すことで、今後の研究を牽引する画期的な一書。

A5判上製・480頁・2023年10月刊行
978-4-585-32032-6・定価13200円（税込）

東アジアの「孝」の文化史

前近代の人びとを支えた価値観を読み解く

雋雪艶・黒田彰［編］

中国をはじめとする東アジアの文明の歴史において重要な役割を果たし、かつては東アジアの人々にとって最も重要な価値観、行動規範であった、「孝」という思想と文化。東アジア各国において伝承された「孝」は、歴史や文化的背景によって異なり、様々な形で表象されてきた。考古学の文物や文献および敦煌の文書などの重要な一次資料にはどのような形で残されてきたのか。
孝の文化は仏教とどのように融合して、変化したのか。また、日本の説話、和歌、謡曲、絵画などではどのように表現されてきたのか。社会史、思想史、文学史、美術史など多領域に散見される「孝」という文化が、長い歴史の中で果たしてきた役割を客観的に認識し、学際的な視点から考察する。

アジア遊学288・A5判並製・336頁・2023年10月刊行
978-4-585-32534-5・定価3520円（税込）

国宝「三十帖冊子」修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

五代十国

乱世のむこうの「治」

山根直生［編］

五つの王朝が交代を繰り返した華北、十の王国によって分割された江南――「五代十国」の時代は、中国史上にしばしばあらわれる「乱世」「分裂割拠」のくりかえしとして、いわゆる「唐宋変革期」における取るに足りない過渡期と見なされてきた。しかし、我々は宋王朝を正統とするために打ち出されたこの「五代十国」の概念にとらわれ過ぎてしまっていたのではないか？ 同時期の各政権・各地方を仔細に検討してみると、新時代に対応しようとする各々の模索のあり方が浮かびあがってくる。従来「乱」や「離」としてばかり取り上げられてきた五代十国それぞれの「治」を先入観無く見つめることで、十世紀前後を跨ぐ中国史の大きな展開を明らかにする。

アジア遊学291・A5判並製・312頁・2023年12月刊行
978-4-585-32537-6・定価3520円（税込）

中国学の近代的展開と日中交渉

陶徳民・吾妻重二・永田知之［編］

二十世紀前半、日本では近代漢学、東洋学や支那学、現代中国学など、中国をめぐる学術研究が盛行した。一方、同時代の中国では、従来の漢学・宋学・清代の考証学に加えて、自国の文化遺産を再評価しようとする国学が勃興し、周辺地域も視野にいれた東方学が芽生えた。しかし、当時の日中両国の中国研究は決して没交渉だったわけではなく、むしろ緊密な協働関係のもとに展開していった。本書では伝統的な経学・史学・文学と、敦煌学や甲骨学など新しい分野をめぐる日中間の学術交流と人的交流の重要な事例を網羅的に考察するとともに、約一二〇点の関連写真と史料で全体像を提示する。東アジアにおける中国学の近代的展開の諸相とその歴史的意味を考えるために必携の一冊。

アジア遊学292・A5判並製・336頁・2023年12月刊行
978-4-585-32538-3・定価3850円（税込）

上海フランス租界への招待
日仏中三か国の文化交流

榎本泰子・森本頼子・藤野志織［編］

19世紀半ばから第二次世界大戦が終結するまでの約100年間、フランスの交易拠点として発展した「上海フランス租界」。この地にはフランス人のほか、革命を逃れてきた白系ロシア人、富裕層・知識層の中国人など、さまざまな国籍の人々が暮らし、豊かな文化・芸術が花開いた。「東洋のパリ」は、世界の人々を引きつけるとともに、中国や日本の文化を欧州に伝える役割も果たすようになる。上海フランス租界をフランス・中国・日本の三か国を結ぶ場と捉え、具体的な人物・事象を掘り下げることで、人々の暮らしから文化・芸術、政策・外交までを多角的に考察する。音楽、美術、文学、教育、メディアなどの幅広い視点から、フランス語新聞や未公刊資料などを多く用いて実証的に明らかにする、日本では初めての書。上海史、アジア近代史、日仏関係史、比較文学・比較文化、ポストコロニアル研究、グローバル文化史に一石を投じる意欲作。

アジア遊学279・A5判並製・304頁・2023年1月刊行
978-4-585-32525-3・定価3520円（税込）

日ソ戦争史の研究

日ソ戦争史研究会［編］

第二次世界大戦末期の1945年8月、日本とソ連との戦争は勃発した。日ソ戦は短期間のものではあったが、戦後の東アジア国際関係に大きな影響を及ぼした。シベリア抑留や北方領土問題など戦後処理が長期にわたり、戦後日本史を考えるうえでも重要な構成要素となっている。それにもかかわらず、日ソ戦争は、日本の歴史学界においてこれまでほとんど注目されておらず、日本近現代史の通史のなかでもふれるものは少なかった。本書では、日本史、ロシア史、中国史、モンゴル史、現代政治におよぶ多面的考察により、日ソ戦争史の全体像、そして、北東アジア規模のグローバル・ヒストリーとしての日ソ戦争の位置づけを明らかにし、今後の現代史研究の礎を提供する。

A5判上製・512頁・2023年2月刊行
978-4-585-32026-5・定価13200円（税込）

宣教師の日本語文学
研究と目録

郭南燕［編著］

幕末から現代まで、多数のキリスト教の宣教師たちが日本を訪れ、膨大な書物を日本語で著述した。外国人宣教師はなぜ、日本語で書いたのか。本書では、確認できた442名の宣教師が日本語で著した、約2700にも及ぶ文献を精査。彼らの日本語使用の特色、ヨーロッパ思想の紹介、日本文化への寄与、日本人との協力を取り上げて、これまで等閑視されてきた「宣教師の日本語文学」という新分野の開拓を試みる。宣教師の著書の書誌情報をまとめた「外国人宣教師日本語著作目録」を収録。

A5判上製・480頁・2023年2月刊行
978-4-585-39026-8・定価12100円（税込）

グレーゾーンと帝国
歴史修正主義を乗り越える生の営み

髙綱博文・門間卓也・関智英［編］

〈加害／被害〉の二分法で捉えられない人びとの姿を「グレーゾーン（灰色の領域）」と呼んだアウシュヴィッツの生存者である作家プリーモ・レーヴィ。その思想に触発され、第二次大戦期の日独「帝国」下に現れた統治空間を新視角から注目し、「協力者」の実像解明に取り組む歴史学の新たな潮流。本書は戦時社会を基底から問い直すことで、意図的な歴史の忘却と「修正」に対峙する、西洋史と東洋史の垣根を超えた共同研究の成果である。
戦時期の「抵抗と協力のあいだ」（グレーゾーン）に生まれた歴史的現象について、最新の研究成果を交えて、地域横断的に比較分析。巻末に、本書で取り上げた歴史的事象を網羅的に見ることができる関連年表を掲載。

A5判上製・536頁・2023年3月刊行
978-4-585-32027-2・定価5720円（税込）

機巧の文化史 異聞
海を渡った三台のからくり人形

村上和夫［著］

「ジャパニーズペインター」と呼ばれる江戸時代のからくり人形は、なぜ異国に渡ったのか。からくり師、時計師、天文家、マジシャン、コレクター……交錯する人物たち。わずかな痕跡を残し消えた高度なからくり人形の謎に迫るため、近代的エンジニアの先駆け田中久重の生涯を足がかりに、からくり製作の歴史と文化創造の過程を丹念に追った一冊。貴重なからくり人形の写真を含む、約100枚の図版を掲載！

A5判上製・368頁・2023年8月刊行
978-4-585-32031-9・定価4950円（税込）

近世日本のキリシタンと異文化交流

大橋幸泰［編］

十六世紀に日本にもたらされたキリスト教とヨーロッパの文化・思想は、既存の文化や思想にどのようなインパクトをもたらしたのか。日本のキリシタン禁制はどのように始まり、どのように終わったのか。中国や朝鮮、東南アジアの布教はどのように展開し、日本布教とどう関わったのか。東アジア世界におけるキリシタンをめぐる異文化の融合と摩擦の問題を、内外の一次史料を用いて日本史・東洋史・西洋史・科学史・思想史・言語学の各方面から検討し、中世末期から近世期の新たな時代像の構築を目指す。

アジア遊学284・A5判並製・256頁・2023年7月刊行
978-4-585-32530-7・定価3080円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
世界史
その他

地方史誌から世界史へ
比較地方史誌学の射程

小二田章［編］

地方を歴史的に描く総合的書物、「地方史誌」。
これらの書物は、世界的に存在し、歴史の産物として、それぞれの地域・国家のアイデンティティと強固に結びつき、伝えられてきた。「ある地方（地域）を描くこと」という人間の普遍的営みに着目し、各地域の地方史誌形成・再解釈における歴史的展開を検討・比較。地域・領域を越えて、相互の関係性を検討するための視角を提示する画期的な一書。

A5判上製・336頁・2023年6月刊行
978-4-585-32028-9・定価8800円（税込）

パブリック・ヒストリー入門
開かれた歴史学への挑戦

菅豊・北條勝貴［編］

人びとが語り、紡いできた歴史、そして、人びとが歴史とともに、歴史を糧に生きていくという行為に目を向け、学問と社会の対話を目指す「パブリック・ヒストリー」は、いま世界的な広がりを見せている学問分野である。歴史学や社会学、文化人類学のみならず、文化財レスキューや映画製作等、さまざまな歴史実践の現場より、歴史を考え、歴史を生きる営みを紹介。人間と歴史との関わりを考え、日常に活かしていくための知識と方法を伝える貴重な一冊。パブリック・ヒストリーを考えるための日本初の概説書！＊『パブリック・ヒストリー入門』（ISBN:978-4-585-22254-5）（2019年10月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・A5判並製・512頁・2021年5月刊行
978-4-585-82254-7・定価5280円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
仏教
関連書籍

中世醍醐寺と真言密教

藤井雅子［著］

醍醐寺は、真言密教の二大流派の一つである小野流を伝持する寺院として、今日まで法流を相承してきた。本書は、醍醐寺に所蔵される聖教や付法史料を広く博捜する中で、醍醐寺における寺院社会の内部構造を明らかにし、中世において如何に真言密教が展開し受容されてきたかを考察したものである。特に真言密教の存続を支える要件とされる「法流」「付法」「院家」をキーワードとして、宗教活動という寺院が本来属性として備えている機能や特性に注目する。
※『中世醍醐寺と真言密教』（978-4-585-03170-3）（2008年8月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・A5判並製・358頁・2023年1月刊行
978-4-585-83170-9・定価10780円（税込）

禅寺の学問

相国寺・両足院の知の体系

編集部［編］

中世日本において禅宗寺院は、大陸からの最新の「知」を伝える場として、宗教のみならず、政治・文化を支える重要な「場」であった。なかでも相国寺や建仁寺両足院は、最先端の五山文学の中心地として、多くの碩学を輩出し、当時の「知」をめぐる状況をまざまざと伝える資料が、いまも大切に伝持・保存されている。相国寺承天閣美術館にて開催された「禅寺の学問―継承される五山文学」、そして、花園大学歴史博物館にて開催された「両足院―いま開かれる秘蔵資料」の成果をもとに、禅宗寺院が日本文化にもたらした「知」の体系を明らかにする。

書物学22・B5判並製・96頁・2023年2月刊行
978-4-585-30722-8・定価1980円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
仏教
関連書籍

鎌倉時代禅僧喫茶史料集成

舘隆志［著］

茶の文化は禅と深く関わるものであり、近年はその価値への世界的評価の高まりとともに、研究も盛んになっている。なかでも茶を日本に伝えた栄西をはじめ、鎌倉時代の禅僧たちの史料は、禅と茶を語る上で避けては通れない。しかし、禅僧による史料は膨大であり、かつ難解なものが多く、これまで体系的な研究がなされてこなかった。鎌倉時代の禅僧の史料を博捜し、喫茶史料を抽出、書き下し・現代語訳および訳注、解説を付す。禅と茶の研究に新たな視座を提供する決定版史料集。

A5判上製・784頁・2023年2月刊行
978-4-585-31014-3・定価14850円（税込）

都市と宗教の東アジア史

西本昌弘［編］

中国の長安・洛陽、高句麗の平壌、百済の漢城、新羅の慶州、琉球の首里、ベトナムのハノイ、日本の奈良・京都・鎌倉・博多……東アジアには古代より様々な都市があった。これらの都市には、王権・社会の安寧や繁栄を祈り、民衆の除災・追福を願う重要な場として、宗教を基盤とした祭祀施設がつくられていた。東アジアにおける国家間、諸文化間の交流は、それら祭祀施設にどのような影響を与え、どのような変化をもたらしたのか。また、王権や公武政権をはじめとする社会諸集団はどのように変化に対応し、受容していったのか。考古学・文献史学・宗教史・美術史・東洋史など様々な視点から、東アジアの都市と宗教・祭祀の問題を捉え直す。

アジア遊学280・A5判並製・240頁・2023年2月刊行
978-4-585-32526-0・定価3300円（税込）

黄泉の国との契約書
東アジアの買地券

稲田奈津子・王海燕・榊佳子［編著］

東アジアの墓葬遺構からは、「買地券」と呼ばれる遺物が発見されることがある。これは死者や遺族が、墓地を正当に購入したことを示す売買契約書であり、その多くは冥界の神々と結んだ契約なのである。古代中国に源を発し、朝鮮半島や日本でもその遺例が発見されている「買地券」は、時代・地域により様々な特徴を有し、東アジアの文化交流史を考えるうえで貴重な資料である。中国・朝鮮・日本に残る特色ある事例を多数のカラー図版とともに紹介、詳細な解説と釈文・現代語訳によって「黄泉の国との契約書」という不思議な存在を読み解く初めての書。図版点数210点以上！

B5判並製・240頁・2023年3月刊行
978-4-585-32030-2・定価4180円（税込）

モノと権威の東アジア交流史
鑑真から清盛まで

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア［著］

古代東アジアにおいて、対外交易はごく限られた機会のものであったが、それだけに一層、各国の政治や文化の形成に大きなインパクトを与えてきた。特に日本においては、中国や朝鮮半島から伝わる最新の情報やモノは、権威の象徴としても重要な位置を占めるものであった。「モノ」「ヒト」「情報」など諸種の要素を仔細に検討することで、政治・経済・文化にわたる重層的な「対外交易」の実態と歴史的意義を照射。物質文化史・対外関係史・農業史・比較史など多角的な視点を駆使し、従来の歴史理解へ新たな観点を提示してきた著者による、長編の書き下ろしを含む最新論集。

四六判上製・368頁・2023年5月刊行
978-4-585-32022-7・定価5280円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
仏教
関連書籍

霊峰の文化史
世界遺産・富士山と世界の山岳信仰

秋道智彌［著］

信仰の対象とされ、さまざまな神話を持ち、その土地独自の方法で祀られる「霊峰」。屹立する雪山や秀麗な裾野をもつ山、苔むす鬱蒼とした山中の幽谷、奇岩の露出する異形の山塊は、自然そのものへの感動と魅力以上に人びとを非日常の世界にいざなってきた。神が自然物の山や大きな岩に宿るとする認識はどのようにして生まれたのか。ヒトは山をみて何を感じ、山から受ける恩恵や災禍をどのように受け止めてきたのか。
世界遺産となった富士山、立山、白山などの日本の山のみならず、エヴェレストやキリマンジャロ、アグン、カイラス山、廬山、黄山など世界各地の「霊峰」と呼ばれる山やまを、多数の図版とともに解説。
ヒトが山に込める想いを解き明かす。

A5判並製・360頁・2023年5月刊行
978-4-585-33005-9・定価3520円（税込）

書物の時代の宗教
日本近世における神と仏の変遷

岸本覚・曽根原理［編］

日本近世の宗教は、出版文化の発達により大きな転換を迎える。中世までの写本の時代と異なり、木版・整版による出版が商業的に発達し、明治以降の洋式活字出版の時代とも異なる、一つの時代が形成されたのである。そのような流れの中で、仏神のイメージや宗教環境はどのように変化したのか。民間のカミ、為政者たちが崇める仏神、そして東照宮を頂点とする国家の宗教体系は、近世社会とどのような関わりを持ったのか。
書物との関係を射程に入れて、社会情勢や文化現象の中で揺れ動く宗教の姿を読み解く。

アジア遊学287・A5判並製・272頁・2023年8月刊行
978-4-585-32533-8・定価3080円（税込）

大谷哲夫先生傘寿記念論集
禅の諸展開

大谷先生傘寿記念論集編集委員会[編]

『永平広録』の訳注をはじめ、道元禅師そして曹洞宗の仏教学・思想研究を領導してきた大谷哲夫。その学問に触れ、影響を受けた、禅宗をはじめとする諸学の研究において活躍する諸賢69名がそれぞれの知見を寄せた記念論文集。

A4判上製・714頁・2023年7月刊行
978-4-585-31015-0・定価11000円(税込)

重要文化財
東福寺 五百羅漢図
修理と研究

石川登志雄[編]

「画聖」と称された室町期を代表する絵仏師・吉山明兆の超大作「五百羅漢図」。
大本山東福寺所蔵の47幅(45幅・附2幅)及び根津美術館所蔵の2幅についての16年の長期にわたる保存修理の成果とその下絵50幅、さらに長らく所在不明とされてきたが、近年、ロシア・エルミタージュ美術館に所蔵されていることが明らかになった第50号を大判のカラー図版により掲載。また、調査の過程により見出された新知見、装?修理における試行錯誤の成果を示した論考・コラム、諸種の資料も収載し、これまで全貌が未紹介であった東福寺五百羅漢図の研究に重要な材料を提供する。日本文化史・美術史・仏教史・文化財学をはじめ諸分野に益する瞠目すべき一書!

B4判上製・276頁・2023年10月刊行
978-4-585-37010-9・定価24200円(税込)

09 10

勉誠社
刊行案内
2023
仏教
関連書籍

11 12

東アジアの王宮・王都と仏教

堀裕・三上喜孝・吉田歓[編]

前近代東アジアにおける王宮・王都は、豊かな交流のあり様を示す多くの共通性がみられる一方、時期や地域によって注目すべき大きな相違が存在する。
これまで考古学や文献史学により、その諸相が明らかになってきてはいるが、宗教行事に関する比較研究は一部の行事を除けば立ち遅れている。
六世紀から十一世紀にかけての東アジアにおける王宮と王都の比較宗教史研究を通して、東アジア世界における、それぞれの「王権」の特色を示すことで、今後の研究を牽引する画期的な一書。

A5判上製・480頁・2023年10月刊行
978-4-585-32032-6・定価13200円(税込)

物語る仏教絵画
童子・死・聖地

山本陽子[著]

日本中世において数多く制作された仏教絵画のなかで、類例のない図様を持ち、制作当時とは異なる名称で呼ばれたり、別の信仰の文脈で語られてきたりした経緯をもつ、特異な仏画が存在する。これらはどのような意図で制作され、何を意味しているのか。そして、なぜ多種多様な形態や伝説を持っているのか。とりわけ「童子・死・聖地」にまつわるこれらの仏画や垂迹画を丹念に読み解き、図像的特徴や成立背景、制作意図を明らかにする。さらに、これらの仏教絵画が制作された時点における、伝承や説話からの影響関係、受容の様相を探る。美術史学・説話文学・民俗学研究など隣接諸学に寄与する研究成果。

A5判上製・616頁・2023年10月刊行
978-4-585-37011-6・定価11000円(税込)

国宝「三十帖冊子」
修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023
美術・芸術

二一世紀の川劇
文化資源化の視点から

江玉[著]

お面が一瞬で入れ替わる「変面」で知られる、中国四川省を代表する伝統劇・川劇。2006年に中国の非物質文化遺産（無形文化財）に登録された川劇は、政治や社会とどのようにかかわり展開・変容してきたのか。現代における役割・意義とは何か。作品のテーマ性や芸術性の比較検討、商業公演のもたらす経済効果、教授・学習の実体、時代に翻弄された役者たちの苦悩など、多角的に分析。中国文化遺産「変面」継承者である著者が、経済・政治・教育の文脈において文化資源化されている川劇の動態を、実体験を交えつつ文献調査やフィールドワークを用いて論じた貴重な成果。詳細な歴史的展開を概説した「付録　四川省と川劇の歴史」を付す。
【本書の特色】・経済・政治・教育の3視点から現代川劇の意義・役割を明らかにする。・川劇の歴史的展開を知ることができる。・華やかな川劇の舞台写真60点をカラー掲載。

A5判上製・224頁・2023年3月刊行
978-4-585-37007-9・定価7480円（税込）

輞川図と蘭亭曲水図
イメージとテクストの交響

野田麻美・静岡県立美術館[編]

東アジアにおける文学・書・画の世界を考えるうえで、とりわけ重厚な二つの画題――「輞川図」と「蘭亭曲水図」。文人画の祖とされる王維、書聖として崇められる王羲之にまつわる故事を絵画化するなかで、園林を舞台とする文人たちの交流はいかにして描かれ、その風景表現はどのように展開したのか。
2021年に修理を終えた静岡県立美術館所蔵の「輞川図巻」をはじめ、近年注目を集める「蘇州片」や、久隅守景、池大雅、富岡鉄斎らの優品など、中国と日本、そして、宋代から近代に至るまでの王維・王羲之イメージを精査・検討。
諸分野の第一線の研究者による論考とカラー図版を含む120点超の書画資料より、イメージとテクストの連環が織りなすダイナミックな世界を照らし出す。

A5判上製・304頁・2023年4月刊行
978-4-585-37009-3・定価10450円（税込）

文と書
中国書字思想の探究

亀澤孝幸[著]

近代以前の中国において、「書」は文学や絵画と並ぶ最高の芸術とみなされていた。文字をつかさどることは世界の統治と同等の意味を有し、この根源的な政治性とあいまって、文字や言葉を記す「書」は中国文化における重要な地位を占めるに至った。書論のみならず文字学、言語哲学、文学論、画論など文字や書くことに関する諸種のテクストを相互に接続、交差させることで、「文字を書くこと」に関する思想――書字思想の体系を明らかにする。近代以降に形成された造形芸術としての片面的な評価を改め、「書字」という人間の普遍的な営みから「書」の意義を捉えかえす意欲作。

A5判上製・288頁・2023年3月刊行
978-4-585-37008-6・定価8800円（税込）

野村太一郎の狂言入門

野村太一郎・杉山和也[著]

狂言って難しい？どうやって見たらいい？
どんなストーリーなの？
狂言のことば・しぐさの見方、知っておきたいおすすめ作品、演者ならではの舞台の裏話など、狂言を楽しむためのエッセンスをたくさんの撮り下ろし写真とともに徹底解説！
新進気鋭の狂言師・野村太一郎によるとっておきの狂言入門！

・初心者でも親しみやすい「柿山伏」・「附子」の台本に現代語訳、舞台写真・豆知識をそえてわかりやすく紹介！
・能や歌舞伎との違いとは？狂言もユネスコ無形文化遺産なの？知っておきたい狂言に関する基礎知識を網羅！
・師匠・野村萬斎や、亡き父・五世野村万之丞（八世野村万蔵）など多くの名人たちとのエピソードも満載！

A5判並製・224頁・2023年7月刊行
978-4-585-37005-5・定価3080円（税込）

重要文化財
東福寺 五百羅漢図
修理と研究

石川登志雄［編］

「画聖」と称された室町期を代表する絵仏師・吉山明兆の超大作「五百羅漢図」。
大本山東福寺所蔵の47幅（45幅・附2幅）及び根津美術館所蔵の2幅についての16年の長期にわたる保存修理の成果とその下絵50幅、さらに長らく所在不明とされてきたが、近年、ロシア・エルミタージュ美術館に所蔵されていることが明らかになった第50号を大判のカラー図版により掲載。また、調査の過程により見出された新知見、装?修理における試行錯誤の成果を示した論考・コラム、諸種の資料も収載し、これまで全貌が未紹介であった東福寺五百羅漢図の研究に重要な材料を提供する。日本文化史・美術史・仏教史・文化財学をはじめ諸分野に益する瞠目すべき一書！

B4判上製・276頁・2023年10月刊行
978-4-585-37010-9・定価24200円（税込）

博物館情報学入門

E Orna & Ch. Pettitt=著
安澤秀一=監修／水嶋英治=編訳

博物館・美術館の文化情報資源の有効活用のために情報学の立場から論じた名著、待望の邦訳！

※『博物館情報学入門』（ISBN978-4-585-00172-0）（2003年6月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・アートドキュメンテーション叢書2・A5判並製・256頁・
2023年9月刊行・978-4-585-80172-6・定価3850円（税込）

物語る仏教絵画
童子・死・聖地

山本陽子［著］

日本中世において数多く制作された仏教絵画のなかで、類例のない図様を持ち、制作当時とは異なる名称で呼ばれたり、別の信仰の文脈で語られてきたりした経緯をもつ、特異な仏画が存在する。これらはどのような意図で制作され、何を意味しているのか。そして、なぜ多種多様な形態や伝説を持っているのか。とりわけ「童子・死・聖地」にまつわるこれらの仏画や垂迹画を丹念に読み解き、図像的特徴や成立背景、制作意図を明らかにする。さらに、これらの仏教絵画が制作された時点における、伝承や説話からの影響関係、受容の様相を探る。美術史学・説話文学・民俗学研究など隣接諸学に寄与する研究成果。

A5判上製・616頁・2023年10月刊行
978-4-585-37011-6・定価11000円（税込）

国宝「三十帖冊子」修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

紙のレンズがひらく
古典籍・絵画の世界

New Aspect of Codicology,
under the eyes of the
Scientific Analysis of Paper

江南和幸・佐藤悟・横井孝［編］

古典籍や絵画、文書など、東アジアには紙を基底材とした文化財が数多く伝来している。そこで使用される紙は、原料や加工処理により、さまざまな表情を残している。これらの紙は、どのように作られ、選択され、流通したのか。文学的・書誌学的・文献学的研究と、高性能デジタル顕微鏡観察や蛍光X線分析による非破壊科学的分析研究とを一体とした「新コディコロジー」により、紙そのものが持つ情報と、その背景にある歴史・社会・経済・政治といった文化状況までもが明らかになりつつある。料紙研究の最先端を伝え、また、これからの課題をも提示する貴重な一冊。
掲載図版200点超！

A5判並製・284頁・2023年11月刊行
978-4-585-39036-7・定価4950円（税込）

訂正新版
図説 書誌学
古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫［編］

有史以来蓄積されてきた「書物」は、人間の英知・思想・思考・情感といった精神活動が、最も明瞭に集約・表出されたかたちで伝承されてきた、学術文芸の遺産である。この「書物」は、なぜここにこのように存在するのか――。「書物」との真摯な対話により、過去から現在、そして未来へと連なる人間の知的営みの一端に自らリンクすることが出来るのである。昭和35年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。掲載図版270点以上！
※本書は『図説　書誌学』（ISBN978-4-585-20004-8、2010年12月刊行）の訂正新版です。

A4判並製・224頁・2023年11月刊行
978-4-585-30010-6・定価3850円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023

図書館情報学
アーカイブズ学
書誌学・本の本

デジタルアーカイブの新展開

時実象一［著］

デジタルアーカイブを取り巻く環境や技術は日進月歩で変化・進化を遂げている。本書は文化財のデジタル化や、映画・新聞・テレビ・ウェブなどメディアのデジタルアーカイブ、3DやAIを始めとする革新的技術の動向など、具体的な事例を豊富な図とともに紹介することで、デジタルアーカイブの最新の現状をわかりやすく解説した入門的な一冊！
【本書の特色】新型コロナウィルス感染症のアーカイブや、3D技術やドローンを使った撮影アーカイブなど、近年話題に上がるトピックスを多数紹介。・読者の理解を助ける図版を多数掲載。重要なWebサイトについては、QRコードも併せて掲載。

四六判並製・320頁・2023年3月刊行
978-4-585-30009-0・定価2310円（税込）

古典籍の文献学
鶴見大学図書館の蒐書を巡る

編集部［編］

『伊勢物語』、『源氏物語』などの物語、歌集・歌学書、古筆切、仏書、漢籍、洋学資料…。鶴見大学図書館では、文献資料に基づく実証的研究を伝統とし、その時々の教職員の書物に対する深い関心と集書への熱意によって徐々に貴重な古典籍が蒐集されてきた。そのコレクションは全国でも屈指の収蔵点数を誇っており、まさに「宝庫」と呼ぶに相応しい。鶴見大学図書館が70年の長きにわたり、博捜と収蔵に取り組み続け、守り伝えてきた営為とその魅力をあますところなく紹介する。

書物学25・B5判並製・120頁・2024年3月刊行
978-4-585-30725-9・定価2200円（税込）

勉誠社
新刊案内
2023
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ

鈴木親彦［責任編集］

デジタル人文学（人文情報学・Digital Humanities;DH）と、デジタルアーカイブ（DA）の関係は長く深い。一方の分野の成果が、直接的・間接的に両分野の発展につながることを、DHとDAの研究者・専門家による論考によって示そうと試みた一冊。

デジタルアーカイブ・ベーシックス
A5判並製・248頁・2023年7月刊行
978-4-585-30302-2・定価3520円（税込）

100年くらい前の本づくり
近代日本の製本技術

編集部［編］

幕末明治期、米欧からもたらされた諸種の技術や制度は、書物の世界にも大きな影響を与え、和装本から洋装本への転換が進んでいった。しかし、その道程が一筋縄で行くものでなかったことは、いまに残された書物の驚くべき多彩な製本形態からも伺うことができる。
近代初期洋装本の解体調査・書誌調査から見えてくる製本の裏側、和装から洋装へと移行する過渡期の書物のあり様を具に検討することにより、日本における洋装本定着の端緒を明らかにする。
※2022年3月10日（木）～2022年7月10日（日）に市谷の杜本と活字館にて開催され、コアな書物ファンに大好評を博した「100年くらい前の本づくり」展を誌上再現！

書物学24・B5判並製・120頁・2023年8月刊行
978-4-585-30723-5・定価2200円（税込）

読書と豊かな人間性

金沢みどり・雪嶋宏一［監修］
金沢みどり・河村俊太郎［著］

高校生を中心としたヤングアダルトの読書離れが、国内外で深刻な社会問題となっている。本書では、より広い視野から子どもの読書の実情や読書環境を捉え、学校図書館の活用による読書教育のあり方について論じる。

ライブラリー 学校図書館学1・A5判並製・288頁・2023年8月刊行
978-4-585-30401-2・定価2750円（税込）

ひらかれる公共資料

「デジタル公共文書」という問題提起

福島幸宏［責任編集］

デジタル環境の中、従来の公文書のみならず、公共性をもつ民間のデジタルコンテンツも対象として、利活用可能な形で蓄積されるべき「デジタル公共文書」。この新たな概念を、利活用者の視点から、新しい知識や社会生活などを生み出す源泉として位置づけ、議論を試みる。「デジタルアーカイブ・ベーシックス」第2期（全3巻）完結！

デジタルアーカイブ・ベーシックス
A5判並製・216頁・2023年11月刊行
978-4-585-30303-9・定価3300円（税込）

訂正新版

図説 書誌学

古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫［編］

有史以来蓄積されてきた「書物」は、人間の英知・思想・思考・情感といった精神活動が、最も明瞭に集約・表出されたかたちで伝承されてきた、学術文芸の遺産である。この「書物」は、なぜここにこのように存在するのか――。「書物」との真摯な対話により、過去から現在、そして未来へと連なる人間の知的営みの一端に自らリンクすることが出来るのである。昭和35年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。掲載図版270点以上！

※本書は『図説　書誌学』（2010年12月刊行）の訂正新版です。

A4判並製・224頁・2023年11月刊行
978-4-585-30010-6・定価3850円（税込）

勉誠社
Benseisha

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-18-4 徳栄ビル4F
WEBSITE=https://bensei.jp/ E-mail=info@bensei.jp
TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025